

出雲流庭園の魅力を探る

服部 博子

1. はじめに

島根県内には、大小様々な日本庭園が残されている。その中でも県東部には「出雲流庭園」と呼ばれる出雲地方独特の作庭様式をもつ、文化的価値が高い庭園が多く残っている。

本分科会では、県内各地の日本庭園を訪ね、その文化・精神を学ぶとともに、地域資源としての活用・保全を考えていくことを目的に、1年目となる今年は、出雲市(旧平田市) 斐川町の出雲流庭園の視察を行った。

2. 出雲流庭園の特徴

出雲流庭園の形態の大きな特徴は、平地利用の庭園(平庭)であることであり、出雲豪農屋敷の庭がその原型である。そのため、築地松のある屋敷の形態と同様に、囲われた空間、外部との「結界」が出雲流庭園の典型である。

また、水を使わない「枯山水」様式が主流であり、飛び石を中心とした庭である。飛び石は、高く据えられ、自然石だけではなく、庭のどこかに石臼や短冊石といった人工石を据えるのが特徴である。茶庭をベースとした様式であり、ほとんどの庭に蹲踞があり、ひさしの直下に置かれている。縁側に上がる靴脱ぎ石は大振りな御影石を使っている。石組は、庭の主体としての役割は果たさず、添え物的な感じが強い。竹垣があり、その技術は非常に高い。石灯籠の種類は、産地であることから様々なタイプが見られる。庭木はクロマツが多く、「雲龍仕立て」と呼ばれるしだれ風の仕立てが特徴である。



写真-1 典型的な出雲流庭園「原鹿江角邸庭園」(築地松で囲まれた庭園)

3. 「借景」手法の出雲流庭園

ところが、今回の視察を通し、島根半島の山地及び山麓に位置する庭園では、いわゆる出雲流庭園の典型である外部と「結界」する庭ではなく、地形的条件を活かして外部景観を取り込む「借景」の技法が取り入れられていることを知った。出雲地方を代表する景観である、宍道湖、大山、中国山地、島根半島の山々といった、この土地ならではの地形的要因や特徴と出雲流庭園の技法を融合させ、この地域ならではの庭園文化を創出していた。

そこで、ここでは、「借景」をキーワードに出雲流庭園の魅力について取り上げたいと思う。

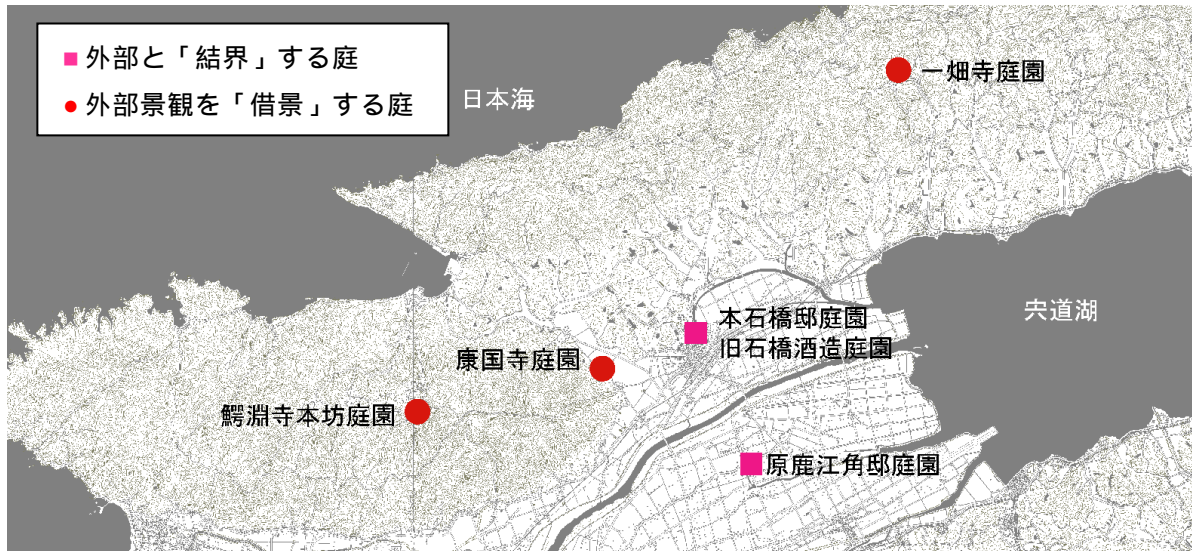


図-1 視察した庭園の位置図

4. 借景の定義

借景は、庭園を造る際に景色を借りるということであるが、眺望との違いは何かなど、厳密な定義は難しい。ここでは、上原敬二著『造園辞典』(1981年)による借景の定義を紹介する。

「厳格な意義としてはそれら(借景の対象物)が自己の庭の主景でなければならない。すなわち仮にそれが見えない[存在しない]としたらその庭は何の価値もなくなるか、価値が低格となるもの、しかし、この主の庭は本義であるがまず存在しない。次に第二義としては主景ではなく、添景、すなわちそれがあるがために庭景は大なる価値を生ずるが仮にそれが見えなくてもひとつのまとまった庭の趣をなしているもの、これが最も多く、通常これを借景式庭園と称している。」と説明している。

5. 借景の技法

借景の技法は、大きく2つに分類できる。

1) 離れた空間を同一化する

視点と視対象との間の地表面を意図的に隠すことによって、遠近感を喪失させ、近景の中に幻想的な遠景を取り込む技法である(図-2)。著名な借景式庭園は、このパターンが多い。

京都は、盆地という地形特性から、著名な借景式庭園が多く見られる。比叡山を借景とした園通寺、正伝寺が有名である。その他、嵐山、東山などを借景とする庭園も多い。

借景の対象は、山に限られてはいない。岡山城を借景とする後楽園、姫路城を借景とする好古園、彦根城を借景とする玄宮園など、城も借景の対象とされる。その他、琵琶湖や桜島などその地域を代表する景観も借景の対象とされている。

2) 連続する空間を一体化する

境界を消すこと、曖昧にすることによって、庭園に隣接する空間を、庭園空間として一体化させる技法である。このパターンは、江戸中期から末期の寺院庭園において一般的にみられた手法のようである(図-2)。

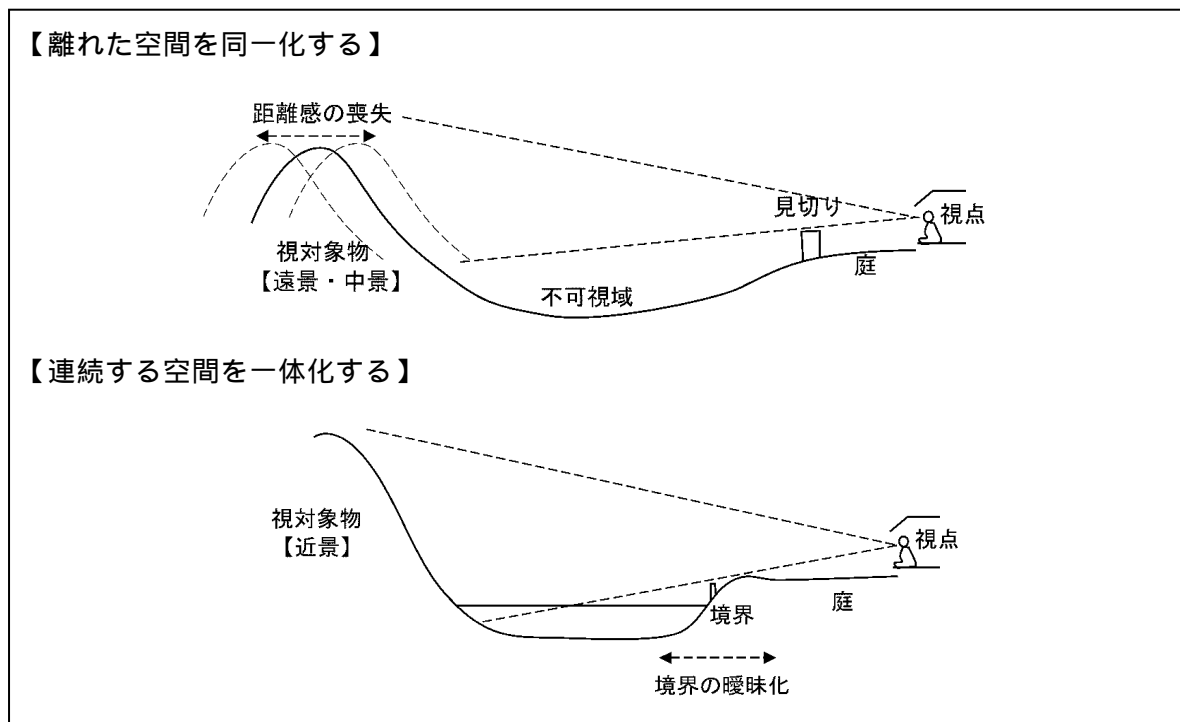


図-2 借景の技法

6. 「借景」手法の出雲流庭園の特徴

今回視察した庭園のうち、島根半島の山地、山麓に開かれた寺院庭園「一畑寺庭園」「康国寺庭園」「鰐淵寺本坊庭園」において、「借景」の技法が用いられていた。これらの庭園の特徴について紹介する。

1) 一畑寺庭園

一畑寺は、島根半島中央部の宍道湖を眼下に望む景色の良いところにある。古くから「目のお薬師様」として全国的な信仰の広がりを持つお寺である。今から約千百年前（894年）に天台宗の医王寺として創開され、今日では臨済宗の一畑寺、一畑薬師教団の総本山でもある。

この庭園は、寺の本坊書院の庭として文化年間（1804～1818年）に造られたものである。枯山水形態のこの庭園は、いわゆる出雲流庭園の雰囲気と多少異なり、やや派手な好みとしてつくられており、京都から呼ばれた庭師により作庭されたのではないかと考えられている。しかし、飛び石を高く据えることや、短冊形に切石を使うことや、自然石で短冊に据える点等、出雲流に見られる手法が各所にあり、これは後年改修されたものと考えられている。

また、離れた空間を同一化する「借景」の技法が用いられている点も出雲流庭園の作庭方法から多少異なった雰囲気を持つ理由である。遠景の出雲富士（大山）、宍道湖、中国山地の山々を庭に取り込み、雄大な空間を創出しているのが大きな特徴である。

『造園辞典』における第二義の定義にあてはまる典型的な借景式庭園である。



写真-2 一畑寺庭園（一畑薬師書院庭園パンフレットより）

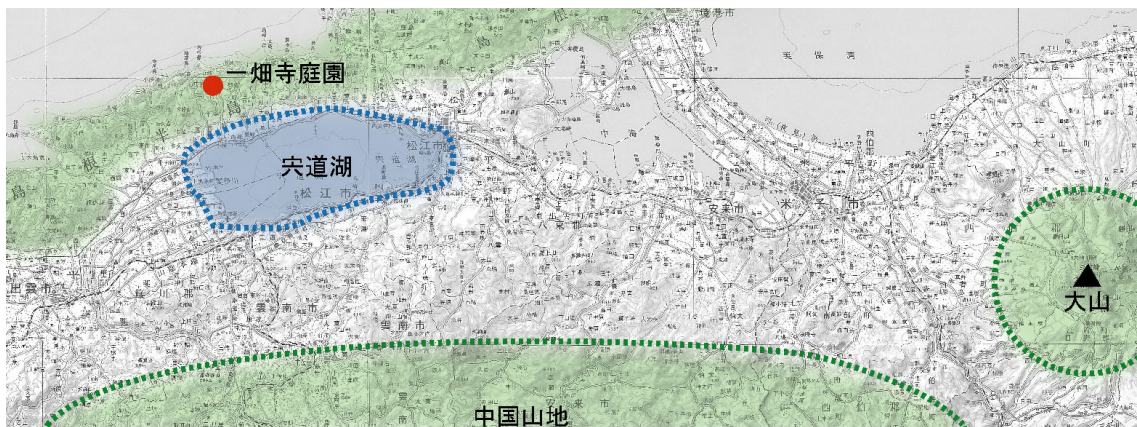


図-3 一畑寺庭園を構成する景観要素

2) 康国寺庭園

康国寺は、天保年中(1830～1844年)に築造され、庭園もその当時作庭されたと考えられる。枯山水形態のこの庭園は、飛び石や蹲踞などの各所に出雲作庭法の典型的な手法をなしている。

一方で、連続する空間を一体化する「借景」の技法が用いられており、出雲流庭園の作庭方法から多少異なった雰囲気を持っている。庭園の周りの境界が北部に多少見られるだけで、自然の背景と庭の区切りを明確にしていない。庭の南側に位置する貯水池と庭はなめらかな曲線で自然につながり、その背後にそびえる旅伏山へと連続している。池と山をあたかも庭の一部であるかのように、一体的空間として見事に扱っている。

この庭園は、仮に借景が存在しないとしたり庭の価値が低格すると考えられる。上原敬二氏が「本義であるがまず存在しない」といった借景式庭園に分類できると考えられ、非常に貴重で価値ある庭園であるといえる。



写真-3
康国寺庭園



図-4 康国寺庭園を構成する景観要素

3) 鰐淵寺本坊庭園

鰐淵寺本坊客殿書院の南庭は、池泉観賞式の庭と書院軒内の平庭とを連続している。干潟様に栗石を敷き浜とし、江戸前期末の作庭である。飛石の手法に出雲流作庭方法がとられており、これは後に改修をしたものと思われる。

築庭当初は浮浪滝を借景としていたと伝えられているそうだが、現在は参道や休憩施設が建てられ、木々も生い茂り、当時の面影を見ることはできない。



写真-4
鰐淵寺本坊庭園

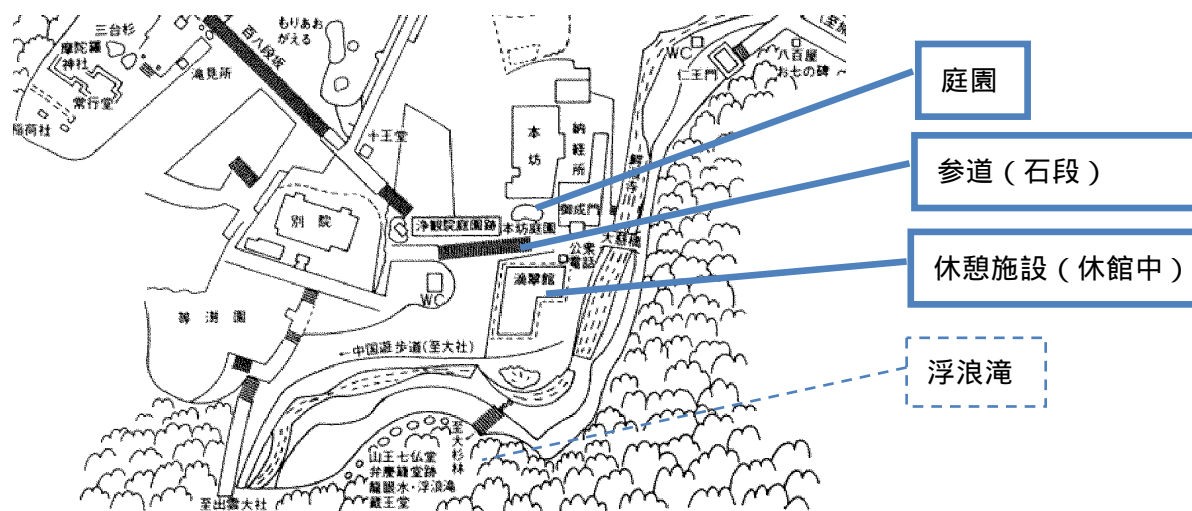


図-5 鰐淵寺本坊庭園を構成する景観要素

7. おわりに

「借景」手法の出雲流庭園は、庭園そのものも魅力的な地域資源であるが、地域の景観の魅力をあらためて知ることができる媒体としても重要な資源であると思う。

今後、その魅力をより多くの人に発信していくこと、そして、庭園のみならず、庭園を構成する景観を含めた地域資源の保全・維持管理を行い、庭園の魅力を維持さらには、向上させることが課題である。その方策は、今後さらに島根県内の庭園の魅力と実態を調査したうえで、最良の方法を探っていきたいと考えるが、現時点で考え得る方法について列記し、まとめとする。

【出雲流庭園の魅力の発信】

- ・出雲流庭園ガイドブックやホームページなどにより、一般の人に親しみやすい形態での情報発信が必要であるとする。
- ・出雲流庭園の技法を街のデザインに取り込むなど、日常的に触れてもらい、親しみを感ずってもらう努力が必要であるとする。
- ・さらに借景の技法から学び、境界の処理の工夫などにより、都市景観をより豊かにしていくことも、庭園の魅力を伝える手段とする。

【庭園を構成する景観を含めた地域資源の保全・維持管理】

- ・借景の美しさが損なわれる危険がある地域には借景を守るための条例等を策定し、保全及び維持管理を推奨していくことが考えられる。

以上